愛するという事　　エーリッヒ・フロム著

~第一章~　愛は技術か

愛に対する誤解

愛とは、運命的に実現する物である、と社会では広く考えられている。しかしこの考えは誤っている。このような考えには三つの前提がある。

|  |
| --- |
| 人にとって重要なのは、愛する事ではなく、愛される事 |
| 愛する事は簡単だが、愛するに相応しい人を見つける事が困難 |
| 恋に「落ちる」ことと、愛の中に「とどまる」事を混同。 |

* 第二の謝った前提が生じた理由は二つある。

|  |
| --- |
| ロマンチック・ラブが広がった為、愛した人と結婚する事を人が求めるようになった。 |
| 商品市場の発達 |

愛は技術である

愛する事は困難であり、失敗を経験する。然し愛する事を止める事はできない。そこで、生きる事が技術であるように、愛する事も技術であると知らなければならない。

~第二章~　愛の理論

1. 愛、それは人間の実存の問題にたいする答え

人間の孤独と無力感

人間は動物と異なる。本能を欠き、不明確、不安定、開かれた世界に、人間はいる。人間はこれにより、孤独を感じ、自然や社会に対する無力感を募らせる。この無力感を克服するために、外界と繋がりを持たずにはいられない。

孤立感から逃れる方法

孤立から逃れる方法には幾つかのパターンがある。

第一に興奮状態による合一体験である。例としては、部族間の祝祭、セックス、麻薬やアルコールなどがある。これらによって興奮状態が興り、その興奮が冷めると再び、それらの行為に出る。

第二に、集団に同調する事である。人間は大抵気付いていないが、違いをなくそうとしている。これは平等の概念と関係する。もともと平等は、個人は唯一無二で異なるとされていた。然し現代の平等はむしろ「同一」に近い。誰もが型に嵌った生活をしている。この没個性化、人間の標準化は円滑に社会を回すのに便利であるから造られたに過ぎない。

そして第三の方法は創造的活動である。人間が自ら計画し、生産し、結果を見るならば、創造する人間は素材と一体化する。しかしこの一体感は人間同士の物ではない。

完全な答えは人間同士の融合、愛にある。

愛と実存

愛は自分の全体性と個性を保った、成熟した実存の問題である。自分の全体性を欠いていれば、その結合は、愛ではなく、マゾヒズムとサディズムである。

愛は能動的な活動であり、それは与える事である。そしてその行為は最も高度な自己の表現である。

愛と生命

愛が与える物は何か。それは物質ではなく、喜び、興味、知識、悲しみと言った自分自身である。そして愛を与えられた者はまた、与える者になり、俱に喜びを分かち合う。

1. 親子の愛

幼児と愛

赤ん坊にとって、自分が自分だから愛される。愛される為にしなければならない事はない。一方、母親の愛情が無条件であるからこそ、それを作り出す事ができないということでもある。そして８歳頃からは、子供は手紙などを自分で与えるようになる。

思春期と愛

思春期に、子供は自己中心主義を克服する。生まれて初めて合一感や共有意識を持つ。

この段階で愛の能力の発達が見られる。つまり、「相手が必要だから、その相手を愛する」という段階から、「愛するから愛される」という段階に達する。

同時に、愛の対象も変化する。愛は母親に対するものから、父親に対するものへと変化する。

最終的には、母親への愛着と父親への愛着は統合される。

1. 愛の対象

愛は、特定の人間に対する関係ではなく、全ての人、世界、生命に対する態度、性格の方向性である。しかし、愛する対象の種類によって、様々な愛の種類もある。

|  |
| --- |
| 兄弟愛…あらゆる他人に対する配慮や尊重。無力な者、貧しい者、よそ者などの相手に対する、表面と表面の関係ではなく、中心と中心の関係。同一感を産む。 |
| 母性愛…子供の生命と必要性に対する無条件の肯定。徹底した利他主義である必要があり、対象が幼児の時は優しい母親でいられるが、本当に愛情深くなるのは難しい。  →自分の助けを欲する者全てを愛する事 |
| 異性愛…他の人間と融合したいと言う、排他的な願望。拡張した利己主義であり、二人という纏まりは周りから孤立している。 |
| 自己愛…愛は全ての人類に向けられるので、その対象は自分にも及ぶ。これは自分を愛せないことから生じる自己愛とは異なる。 |
| 神への愛…人間の愛の発達に伴い変化。 |

* 愛って何

「愛は何よりも与えること」　　　P43

「愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかけること」P49

「秘密を知る為のもう一つの方法」P54

~第三章~　愛と現代西洋社会におけるその崩壊